学位論文の内容要旨

題名：初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの開発と評価－子どもの両親との役割関係葛藤の解消に向けて－

専攻領域・分野：女性健康看護学領域　助産学・遺伝看護学分野
学籍番号：2162008003　　氏名：　木村　志穂

【目的】

本研究は初孫を迎える祖父母を対象に、子どもの両親との役割関係葛藤の解消に向けて祖父母役割獲得の促進と、子どもの両親との関係性の強化に向けた教育プログラムを開発し、評価することである。

【方法】

プログラムの目的は「新たに祖父母となる者が現代の育児についての知識と技術を習得することで、祖父母としての役割獲得の促進につながる。また、妊娠中に祖父母が子どもの両親と向き合い、関係性を見直すことで、関係性を強めることができる。さらに、祖父母と子どもの両親との間で生じうる役割関係葛藤の解消につながる。」とした。2 部構成からなる教育プログラムを作成し、第 1 部は「現代の育児を理解する」、第 2 部は「子どもの両親との関係性の見直しを図る」とした。本プログラムは、妊娠 30 週以降の初産婦をもつ祖父母とその家族を対象に、勤労世代である家族員が参加しやすい土曜日の午後に開催し、全 2 回、各 2 時間で行った。本プログラムでは、現代の育児に関する知識や技術の提供を行うとともに、祖父母が子どもの両親と向き合う機会を設け、子どもの両親との関係性の強化を図るためにグループワークを行った。グループワークでは、地域で多くの母子とその家族に関わっている経験の豊富な助産師にファシリテーターとして協力してもらった。助産師は母子とその家族が本質的にもっている能力を最大限に発揮できるよう支援していく専門家である。その専門性を生かし、それぞれの家族が抱えている悩みを引き出すことで、家族が互いを理解し、解決の方向性を見いだせるように関わった。家族員 1 人 1 人が自分の思いを語ることができる時間を設け、ファシリテーターは家族員の思いを解釈し、他の家族員に伝えていく役割を担った。さらに、育児において役割関係葛藤が生じた際に、祖父母としてどのように対応していくかについても話し合った。

本教育プログラムの評価は、①グループワークにおける参加者の語りの内容、②3 つの尺度と独自に作成した質問紙を用いた質問紙調査（介入前，産後 3 ヶ月時)、③面接調査（産後 3 ヶ月時)、の 3 つの方法で行った。質的データについては内容分析を行い、質問紙調査についてはプログラム実施前後での得点比較をし、Wilcoxon の符号付き順位検定を行った。

【結果および考察】

2 日間の教育プログラムには、9 組の家族、合計 45 名が参加した。

1. 初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムを開発し、実施したところ、9 組の家族において、祖父母は子どもの両親との間で役割関係葛藤が増大することなく、祖父母としての役割を遂行することができていた。
2. 第 1 部の「現代の育児を理解する」というプログラムにて、現代の育児について根拠に基づき説明をすることにより、祖父母は＜現代の育児に対する共通理解＞を示し、

子どもの両親との間で、時代背景による育児観のギャップを生じることなく、育児を遂行できることが明らかとなった。

3. 育児経験のある祖母は、講話や沐浴演習を通して、＜孫の育児への自信がつき＞、孫の育児において手段的側面で子どもの両親をサポートしていた。このことから、孫の出産前に現代の育児に関する知識や技術を提供することで、祖母は過去の経験を思い出し、育児においてその力を発揮できることが明らかとなった。
4. 育児経験の少ない祖父であっても、沐浴演習を行うことで、＜孫の育児へのきっかけづくり＞が可能となり、手段的側面で子どもの両親をサポートすることができていた。また、グループワークにおいて、育児における過去の反省を言葉にしたり、他の家族員の思いを知ることで、＜祖父母としての役割受容＞につながり、間接的に子どもの両親をサポートすることにつながっていた。
5. プログラムの実施により、「現代の育児についての知識がなく不安だ」「育児に関する技術ができるか不安だ」「祖父母として育児にどのように関わったらよいかわからない」「育児を手伝っていく上でどこまで介入してよいか子ども夫婦に遠慮がある」という、4 つの項目においてプログラム実施後、有意に得点が下がっていた。また、「子ども夫婦から求められている祖父母の役割について理解している」という項目において、プログラム実施後、有意に得点が上がっていた。プログラムにおける講話や、グループワークにより、祖父母の育児対処能力が高まり、祖父母としての役割を認識できるようになることが明らかとなった。
6. 第 2 部「子どもの両親との関係性の見直しを図る」において、グループワークを実施したことで、＜家族員相互の理解の場＞という効果が得られた。妊娠期に祖父母が子どもの両親と向き合い、互いの思いを語る場を設けることで、＜祖父母としての役割受容＞につながり、孫の育児に向けて役割意識が高まることが明らかとなった。妊娠期から育児期にかけて、「親」から「祖父母」へと役割が変化する時期であるからこそ、祖父母という役割を遂行していくにあたり、自身の過去を振り返り、思いを語るという作業を行うことで、祖父母としての役割受容につながることが明らかとなった。
7. 産後 3 ヶ月までの間に、子どもの母親との間で役割関係葛藤が生じた際に、祖母は子どもの母親を保護したり、家族員間の調整を図っていた。また、手段的側面での役割調整だけでなく、情緒的側面においても子どもの母親をサポートし、育児が円滑に行えるように支援していた。

【結論】

初孫を迎える祖父母に対して、妊娠期に教育プログラムを実施した結果、祖父母の育児対処能力が高まり、祖父母の役割を認識することに効果があった。また、家族の関係性の見直しを図るグループワークを行ったことで、家族が互いの思いを理解することができていた。妊娠期に祖父母と子どもの両親を集い、育児に向けて家族の関係性にアプローチしていく本教育プログラムは、育児において子どもの両親との役割関係葛藤の増大を防ぐことに効果的であった。

キーワード：初孫，祖父母，役割関係葛藤，教育プログラム